

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

コロシウム・カフェ閉店

宇高雄志 (兵庫県立大学環境人間学部教授)

マレーシアの首都クアラルンプールの目抜き通りにあったコロシウム・カフェ & ホテルが100年の歴史を終え閉店した。これもコロナ禍がもたらしたものだ。

1921年開業のこの店は、マレーシアで最も長年にわたって営業しているコロニアル風のレストランとして知られてきた。

熱せられた鉄板の上でソースが跳ねるステーキと、飛び散るソースを受け止める白いエプロンが愛らしかった。メニューは「コロニアルの遺産とハイナン(海南)料理」をうたう。どこか威厳に満ちたウエーターの諸氏も往年の大都市の風情だった。

往時は、クアラルンプールの人々は隣の映画館での映画鑑賞とコロシウム・カフェでの食事を楽しみにしていた。最初期にはドレスコードもある格式高い社交の場で、折に触れて国内外の情勢に関する議論が交わされていたそうだ。



過年にスケッチしたコロシウム・カフェ (筆者提供)

コロシウム・カフェの建物はアールデコ様式のショップハウス(1階を店舗、2階を住居として利用する建物)。どっしりとした柱がファサード(建物の正面部)を構成し、ベランダウエー(建物の道路に面した部分にある歩廊)には緩やかなアーチがかかる。正面には見かけ2軒分の広い間口があり、右側にレストラン、左側にカウンターを備えたバーがあった。内部でもこの2軒はつながっていて、行き来ができた。

入り口はマホガニー調のデザインで、両開きのドアが中央にある。薄く色の入ったすりガラスがはめられ、太い字体で COLISEUM CAFE & HOTEL と誇らしげに掲げられていた。玄関周りもインテリアも簡素なデザインだった。ステーキの焼ける煙を天井のファンが攪拌(かくはん)する。2階の宿は、マレーシアの前身のマラヤ連邦時代から多くの旅人に愛されていた。

いよいよ閉店が決まると、コロシウム・カフェを愛

する人々から惜しむ声が上がった。近年、ショップハウスをはじめとする歴史的建造物は全国的に、単なる老朽化した建物としてのみならず、その価値が見直されている。シンガポールのチャイナタウンなどの観光地としての成功も後押ししているのかもしれない。

特に2008年に世界文化遺産となったペナン島とマラッカの市街地では、これまでならば取り壊されていた建物が法的にも保全の対象となり、安易に取り壊されることがなくなった。これらがブティックホテルやカフェとして再生されていく。いまや投機の対象としても国内外から購入者が現れて高値で取引されている。

ただ、多くの元の居住者は家賃上昇に伴い市郊外に住まいを移してゆくことになる。何代も伝えられてきた商いの街角から消えてゆく。

戦前に建てられた不動産の賃貸価格を低く抑えていた「家賃統制令」(Control of Rent)が00年に撤廃されたことで、戦前に建てられたショップハウスを含め物件価格が上昇することもあるだろう。コロシウム・カフェも戦前に建築された建物で、この閉店も賃貸契約の満了に伴うものとささやかれている。

文化遺産保全の観点からは、古い建物が生かされるのはいいことだ。しかし、もうけを優先したからか、建物の修理が安易で丁寧でない残念な例も散見される。安っぽいペンキが塗りたくられ、すぐに飽きられる。建物はそれを使う人々が丁寧に使い続けることで輝きを増すのに。

さてコロシウム・カフェであるが、クアラルンプール郊外で支店3店の営業が続けられている(21年6月時点)。閉店した本店の店舗がこの先どのように使われるのが気になるところだ。

ただ、クアラルンプールに住む人の反応は「古いコロシウム・カフェが閉店したのは残念だけれど、郊外の店の方が車も止めやすくて良いのでは」とのあっさりとしたものだった。

街の風景が、まるで軽業のように日々描き変えられるクアラルンプールでは、これくらい過去や記憶にも潔くないと、変化の大波に乗り損ねてしまうのかもしれない。

さてコロナ禍が明けるのはいつだろう。そのとき、コロシウム・カフェのないクアラルンプールの街角は、どんなふうに見えるだろう。

< 筆者紹介 >

1969年、兵庫県生まれ。兵庫県立大学環境人間学部教授。専門は建築学、文化遺産保全。ペナン州のマレーシア科学大学に研究員として3年滞在。建物と人の暮らしの関係を捉えている。